

水上瀧太郎全集 七卷

昭和十六年八月五日印刷
昭和十六年八月十一日發行

水上瀧太郎全集 七卷

著者 阿部章藏

發行者 岩波茂雄

印刷者 白井赫太郎

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

發行所 岩波書店

電話九段(33)一八七番
振替口座東京七四四一六番
會員番號一〇二〇三七番

配給元

東京市神田區
淡路町二丁目九番地

日本出版配給株式會社

精興社印刷 板倉製本

・丁落・不齊等全品なまがしまし直ち申出願ひ。お取替致し。・

目次

順風	一
畫布	一四七
遺産	一八七
夏期實習	二二九
銀座復興	二九五
停年	四〇三
二代目	四四一

順風

窓際の机の上に、林檎と柿と葡萄がある。外光を浴びて、靜物の肌は艶めかしい柔かさを見せて、水々しく輝いてゐた。人が見てゐない時は、互に抱きあつて生命の喜びをさゝやきかはしうな色彩だ。

矢部は水繪の筆を投捨て、嘆息した。

「駄目だ。どうしても、まるみと、つやが出ない。此の具合よあひよくふくらんだ立體感が、わかつてゐて描けない。」

友達の寫生の邪魔にならないやうに、隅つこで厚ぼつたい本を讀んでゐる三輪の方に顔をふりむけて同情を求めた。

「手法を變へたのがいけないのぢやあないのか。」

年長の友達は、難解の字句に出あつて字引を引いてゐたが、本を閉ぢて立つて來た。

「僕は悪いとは思はない。以前のやうに繊弱な色の諧調に溺れてゐた時代よりは一進歩だぜ。」
完成に近づいてゐる靜物畫に、二人は批評の視線を集めた。

「そりや意識的に變らうとしてゐるんだから、多少面目はあらためたさ。それに、僕は今迄は概念で物を見てゐた事に氣がついた。林檎なら林檎を描く場合に、頭の中の林檎が筆のさきにこびりついてゐて、ほんとの林檎はどうしても描けないんだ。見たまへ。ほんものは素晴らしい元氣で光つてゐるだらう。それなのに、僕の畫のやつは生きてゐない。水分も無ければ重量も無い。駄目だよ。」

矢部は、自分の畫に不満足なのだが、その不満足の點をはつきりつかんでゐる自覺で昂奮してゐた。自分の畫のまづさを残りなく知つたのはつい此の頃の事だつた。

「レインボオ俱樂部の奴等は、僕の畫の變つたのをよくないといふんだ。だけれども、僕には、もう以前のやうな畫を描く氣持は無い。第一、僕は水繪では駄目だと思ふ。どうしても油でなくては駄目だと思ふ。みんなは材料にはよらない、水繪だつてあらゆるものゝ生命を描き出せるといふんだけれど、僕は水繪は文學なら隨筆だと思ふなあ。」

立上つて室の中を歩き廻りながら續けた。

矢部は、年齢こそ若かつたが、學生仲間の繪の俱樂部で、最も傑出した一人だつた。學校内で催す春秋の展覽會には、色調の美しい彼の風景畫や靜物畫が、何時も人氣を集めた。中學部を卒業して、引續いて學校に籍は置いてゐるが、自分では思ひ切つて畫家にならうかと迷つてゐた。三輪は友達の廣い額——病的に青白い額や、薄く一文字に結んだ唇に、力強い感激のあふれてゐるのを見てとつた。

「同感だなあ。水繪だつて油繪だつて同じだなんて議論は、議論としての面白さ丈だ。水繪には水繪としての面白さがある。油繪には油繪の面白さがある。さうして僕達は、水繪の面白さに安んじてゐられなくなつて來たんだよ。趣だとか味だとかいふものよりも、もつと實體感をつかみ度いんだ。僕自身、もう歌なんか捨てようと思つてゐる。歌は、たつた三十一字で、人の心の深さまでもよく現はし得る事は事實だ。しかし、此の極まりなく廣い人生の諸相は盛り切れない。僕は小説を書かうと思ふ。それも真正面から描寫で押通す本格の小説を書き度いんだ。」

彼は友達のを批評するよりも、自分の感激に酔つてゐた。讀みかけの英譯本を手にとつて拳骨で叩いた。

「トルストイつて奴には參つちやつた。どんな場面でも、どんな人間でも、真正面からも、ろくに描

いてしまふ。此の力強い描寫力つてもものは日本人には無い。」

「無いといひ切られては口惜くふしいなあ。どうして毛唐は自分の感傷に溺れないで、物の本質をつかむ力を恵まれてゐるんだらう。」

「癩だね。」

二人とも笑ふ積りでゐて笑へなかつた。しばらく、二人とも黙つて、矢部の描いた畫面に視線がとどまつてゐた。

晴れた日の寄宿の晝は静かだつた。中庭でボオルを投合つてゐる音が冴えて聞えるばかりだつた。

「僕、散歩して來る。行かない。」

突然矢部は、自分の晝を見捨て、云つた。

「僕はもう少し勉強する。」

「あんまりいゝ天氣だ。」

矢部は窓をあげて眞青な空を仰いだ。

「秋だ、秋だ。」

嘆息するやうにつぶやきながら、壁にかゝつてゐる帽子をとつて出て行つた。

廊下を遠ざかつて行くスリツパアの音を聞終つて、三輪は又「戦争と平和」を開いたが、讀む事に注意が集らなかつた。此の頃、いつも思ふのだ。どうしても小説を書く。明治から大正へかけて幾多のすぐれた作家が出たが、それよりも規模の大きい小説を書く。形式の新奇を求めたり、字句の新しさに凝つたりするので無く、先人の求めて行きつかなかつた處迄乗越して行く。さう思ふ丈で、全身に力瘠の隆起する感があつた。殊に、矢部も素人のなぐさみ程度の水彩畫にあきたりなくなつたといふ事實が、彼の心を打つた。矢部がレインボオ俱樂部の花形なら、こつちは丘陵歌會の第一人者だ。それが、歌の形式では、既におもひが盛り切れなくなつた。豫々好んで讀んだ外國小説の、人生そのものを直寫した力強さに、一人よがりの頭をどやしつけられた。同時に、藝術をなぐさんだり、あげつらふ心が消えて、死身になつて制作し度い欲求が深くなつた。家庭に於る四圍の關係から、經濟學部に入つた事をつくづく後悔した。年少の矢部が何時の間に大人になつて、學校なんかやめてほんものゝゑかきにならうと云ふ心を起した事も刺戟となつた。三輪も、明治文壇の巨匠の踏んだ道を選んで、學校を去つてもいゝといふ考を持つた。

矢部の描きかけの靜物を見ると、一層感慨が深かつた。年齢の違ふ二人の間で、三輪は萬事指

導者の地位にゐた。藝術觀賞の眼を開いてやつたのも、水彩畫の手ほどきをしたのも三輪だ。しかし、何時の間にか矢部は矢部の才能を延ばし、その才能を自覺して來た。手本を眞似したり、手探りでやつてゐた時代はわけもなく面白がつてゐたが、段々面白さ丈では濟まなくなつて來た。東京の下町の大商家の息子らしく、繊細な趣味はいちはやく、芽を吹いたが、次第にうはつづらの甘美な喜びに空虚を感じて來た矢部だ。容易には把握出來ない欲求が、畫面に不統一をもたらし、林檎と柿には努めて立體感を現はさうとしながら、葡萄の露つぼい肌の美しさに誘惑されて、それ丈はむかしながらの纖弱な色の諧調に泥どろんでゐる。だが、その畫全體として、何か未來には大きくなる力を約束してゐるやうに認められた。三輪は自分の心持に引つけて、感激した。

そんなにお前はなぜ歎く。
草の褥しよねに寝轉んで、

わしが言ふこと、お聞きやれ。

何時も、うたふ歌をうたひながら、須賀は廊下の遠くからスリツパアを引擦つて、大きな體を運んで來た。

人の浮世の見えを棄て、

口笛吹いて、氣を安く、

現の夢を見てゐやれ、

草臥れ息めに山を見て、

腹が減つたら又歩け。

三輪が一寸舌うちしてふりかへつた時、戸をあけて入つて來た。つい今迄運動場をかけ廻つてゐたまゝの姿だ。

「直ちやんは。」

「今迄畫を描いてゐただけけど、散歩に出て行つた。」

「又カフエ・ロビンに行つたんだな。」

須賀は疲れた體を椅子にもたせかけて、健康なあくびをした。「二十世紀のおかめ」といふあだ名の通り、幅廣の、怒つても笑つてゐるやうな顔に、脂肪と埃が浮んでゐた。三輪は、須賀の言葉にどきんとした。

「君、知つてるだらう。直ちやん此の頃は毎日ロビン通ひなんだぜ。草の縁も萌え出るものか。」
くつたくの無い笑顔をしながら、いきなり卓の上に手を延ばすと、須賀は葡萄をちぎつて口に

入れた。又ひとつちぎつた。

三輪はいやな顔をした。不機嫌の時にあらはれる立皺たてしわが、眉間に深くなつた。草の緑といふのは彼の舊作しゆの下の句だ。いかに幼稚であるかは誰よりも自分が知つてゐる。それを持出されたのもいやだつた。その上、矢部が一生懸命で描いてゐる果物を、たゞ食ふ爲めのものと同一視してゐる相手の態度がいやだつた。

「よしたまへ。折角直ちやんが描かうとしてゐるんだ。」

「いゝ葡萄だぜ。素敵にあまいや。」

たしなめられても、須賀はもう一つ口に入れた。激しい運動の後の渴いた咽喉のどに、柔かく厚い肉から滲み出るつゆが、爽かに冷めたかつた。彼は憐寸あつちを擦つて、目を細くして煙草をふかした。「兎に角直ちやん本氣らしいんだぜ。」

須賀は又話をもとへ戻した。學校の正門前の喫茶店にゐる娘に、矢部が心を寄せてゐるといふのだ。その家は、學生が晝飯を喰べに行つたり、お茶をのみに行くところだ。夫婦と、給仕が一人ゐる丈だつたのが、近頃、親類の者を養女にしたといつて、未だ肩揚かたあげのとれない娘が來た。快活にいいきした表情の、家畜のやうな感じの娘だ。三輪は、その娘と矢部とを一緒に想ひ浮べ

て、自分の顔が紅くなつた。一切無經驗だ。學生仲間の傳統的精神から、女といへば、輕蔑しなければ幅がきかないのだ。實は極端に神聖視してゐるのだ。三輪は夙に、女のなつかしさに惱まされてゐた。

「初戀だ。きれいなもんだな。」

小説で覺えたやうな事を云つて、須賀はしきりに煙草をふかした。わざとらしい言葉だが、三輪には妙に心を打つ響をもつてゐた。不安と嫉妬を感じた。

須賀は手拭と石鹼箱シヤボンをひとつかみにして湯殿に出かけた。三輪は頭が重いので、それを一掃する爲めに散歩に出た。寄宿舎の入口に立つ銀杏の梢から、風も無いのに黄葉が微かな音を立て、大地に散り敷いた。

「秋だ、秋だ。」

さうつぶやくと矢部の感懐が、三輪の心にも浮んだ。遙かに見はらす丘の下の町が、西日を浴びて海迄つゞいた。

三輪はあてもなく町を歩いた。本屋の店頭にも立つた。草花屋の飾窓の硝子に顔を押しつけて佇みもした。しかし、心はおちつかかなかつた。彼は何時の頃からか、往來を歩いてゐる間に見る女

に、その美しさを標準として第一第二第三と順位をつけて記憶する事をならはしとした。學校の近廻りでは、誰もが知つてゐる小間物屋の娘が第一の美貌だつた。何處とかの藝者だつたといふ下駄屋のおかみさんも、大概の日は第二位を保つた。その二人に勝る人にはなかなかゆきあはない。よく、近所の女學校の退出時間を擇んで、わざとその門前を歩いてみるが、並ぶ程のものは見當らなかつた。彼は、惱ましく不潔な妄想の中で、二人の女の、あらゆる姿態をほししまゝにした。

第三位は其の日その日で變る事が多かつた。此の頃は、ひそかにカフェ・ロビンの娘をその順位に數へる事もあつた。須賀の話を出して、胸がわくわくした。

ロビンの前を三輪は二度三度通り過ぎた。小間物屋の娘も、下駄屋のおかみさんも、今日は店にゐなかつた。どうしてもロビンの娘の顔を見なければ何か不幸が身の上に来るといふやうな氣持もあつた。今日は、あの娘が第一の位につく——さう思ふ丈で氣臆おくれがして、扉かじを押して入り兼ねるのであつた。日がかげつて町にはあかりが付き、てんでんに散歩してゐた學生も坂をのぼつて寄宿へ歸つて行く時刻になつた。幾度も、自分もその仲間にまじつて丘の上かみに歸らうと思ひながら、たうとう彼はロビンの扉の中へ吸ひ込まれた。